

女子大國文

第百七十三号

令和五年九月発行

女子大國文 第百七十三号

令和五年九月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百七十三号

令和五年九月十五日 印刷
令和五年九月三十日 発行

〒616-8503 京都市東山区今熊野北日吉町三番地
編輯兼 発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五三一九〇七六
FAX 〇七五-五三一九一二〇
振替 〇〇八〇-五-三一三四

〒616-8504 京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五-四一四一〇八代
FAX 〇七五-四三三-六二八二

卿内侍・姉小路済子の文学活動……………小山順子(一)

『源氏物語』丁子吹き料紙本「宿木」の性格……………池尾和也(二八)

京都女子大学図書館蔵元禄頃写『方丈記』紹介……………中前正志(七四)

与謝野門下新詩社歌人・田村黄昏について……………宮本和歌子(二四)

京都女子大学図書館蔵、

吉村忠夫画・吉井勇歌『地獄変絵巻』紹介……………峯村至津子(五〇)

——絵と歌が奏でる魔境——

報……………(七五)

京都女子大学国文学会

彙報

○女子大國文一七三号をお届けします。

○野澤真樹先生の御就任のお言葉をいただきました。

○井上博嗣先生のご逝去を悼む追悼文を掲載いたしました。

○優秀論文発表会の卒業論文要旨・体験記、行事に参加しての感想を掲載しました。また、新入生歓迎行事の感想文を掲載しました。

研究室たより

○四月より新任として野澤真樹先生をお迎えいたしました。ご専門は、近世文学（浮世草子・滑稽本等）です。

○本学名誉教授井上博嗣先生のご逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

○本学科教授をお務めになりました浅野三平先生のご逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

○今年度の優秀論文発表会と新入生歓迎行事は、対面で開催させていただきます。

○昨年度一年間、京都大学にて国内研修されていた小山順子先生が、元気に戻ってこられました。

○今年度一年間、中島和歌子先生が京都府立大学にて国内研修されます。

○今年度の文学部国文学科長および国文学会代表幹事は、田上稔先生です。山中延之先生、宮崎三世先生とともに、国文学科・国文学会の運営に尽力されておられます。

二〇二三年度国文学会行事（前期）

○新入生学科ガイダンス

四月七日（金）午前九時より

於…J二二四・J二〇二教室（クラス毎に分けて実施）

○優秀論文発表会

五月三日（土）一三時より 於…J四二〇教室

〈卒業論文〉

『万葉集』巻十七「追和太宰之時梅花新歌」の解釈

—「追和」の在り方と三九〇四番歌の解釈を中心に—

野添梨衣奈氏

『古本説話集』上巻第三十八話「樵夫詠隠題事」成立考

—木こる童と散る桜—

金尾 涼乃氏

泉鏡花「琵琶伝」の鸚鵡

—鸚鵡琵琶の役割とその典拠—

瀨谷 美里氏

国木田独歩「恋を恋する人」の表題について

—「恋を恋する」という表現に着目して— 藤野 七緒氏

○新人生歓迎行事 能楽鑑賞会

五月二十七日(土) 一三時より 於…音楽棟演奏ホール

能の歴史・囃子・狂言に関する解説を聴講、謡体験 装束着

付・実演、狂言「寝音曲」、仕舞「橋弁慶」を鑑賞。

野澤先生をお迎えして

着任の「挨拶

野澤 真樹

令和五(二〇二三)年四月に国文学科に着任した野澤真樹と申します。専門分野は近世の散文作品で、現在は十八世紀の上方の小説を主な研究対象としています。

京都は学生時代からの十一年間を過ごした土地です。私にはやや引越癖のようなものがあり、北白川から吉田山上の真如堂前町、出町柳と、三、四年ごとに母校周辺の賃貸アパートを転々

としました。博士後期課程を修了し、二〇一七年度に大谷大学で任期制助教を一年間勤めた後、岡山県のノートルダム清心女子大学での五年間の勤務(その間も一度引越しています)を経て、この度なじみ深い京都の地で再び研究・教育に携われることを大変うれしく感じております。

私の研究の出発点は上田秋成でした。卒業論文で『雨月物語』『吉備津の釜』を取りあげ、大学院に進学してからは西鶴の作品や八文字屋本を読み浮世草子の面白さに惹かれて、修士論文の題材に秋成の浮世草子『世間妾形氣』を選びました。その後、秋成の浮世草子にも登場する大阪の実在人物が描かれた様々な作品に興味を拡がり、同時代の浮世草子や滑稽本、随筆、評判記などに手を伸ばして研究を進めています。私を研究の世界に導いてくれた秋成も、この京都で知恩院前町、衣柵丸太町、南禅寺にほど近い西福寺など、転居を繰り返したといえます。研究の対象はやや秋成から離れつつありますが、秋成の「引越癖」には一方的に親近感を抱いており、二度目の京都生活であらためて彼の生きた時代に思いを馳せてみたいと考えているところです。

私が卒業論文を執筆した平成二十二(二〇一〇)年はちょうど上田秋成没後二百年にあたり、京都国立博物館で上田秋成に関する特別展が催された年です。この原稿を執筆しながら、同じ年に、

京都国立博物館の主催で本学丁校舎にて行われた土曜講座に参加させていただいたことを思い出しました。その際には卒業論文の材料になるかもしれないという軽い気持ちでいましたが、今こうして同じ場所で研究を続けられていることに縁を感じます。

着任から二ヶ月が過ぎ、少しずつ本学での授業の雰囲気も掴めてきました。授業では浮世草子を題材とすることが多く、今年度前期は二回生向けの「基礎演習」で西鶴の『好色一代男』と『好色一代女』、三回生向け「演習Ⅰ」では八文字屋本の『世間娘氣質』を読んでいます。毎回授業後に提出させるコメントからは、学生ならではの現代風の視点や、ほほえましい勘違い、学生が普段接している作品との共通点を教えられたりと、日々、近世文学と現代の人々との橋渡しをするためのヒントをもらっています。

担当科目のうち、一回生から履修できる「講読近世」では、西鶴の裁判小説『本朝桜陰比事』を教材としています。この授業のイントロダクションで扱った『本朝桜陰比事』巻三の「落し手有拾ひ手有」は、落語「三方一両損」に似た筋書きの話です。その冒頭に、次のような記述がありました。

むかし都の町はづれより賀茂川の岸伝ひに、北山へ帰る老人有。折ふし十二月廿八日の夕暮、世間は春の事ども取いそぎ、心せはしきけふも、御堂下向の道芝に紙包見えけるを拾

ひあぐれば、「小判三両」と書付有。

（西鶴選集『本朝桜陰比事 翻刻』（おうふう、一九九六年）より引用。句読点を改めました。）

『本朝桜陰比事』は都の公事沙汰を描く作品で、右の箇所でも「賀茂川」「北山」という具体的な地名が見えます。ここを読む際、前任校ではGoogleマップをスクリーンに映し、位置関係を確認しながら説明していましたが、本学ではその必要はありません。そして「御堂」の説明に差し掛かり、「御堂は浄土真宗の寺院のことで、京都ならば西本願寺や東本願寺のこと」とまで話したところで、はっと気がついて、「そういえばみなさん、入学したときに西本願寺に参拝しましたよね」と言葉を続け、なんと話の早いことか、と感動したのを覚えています。

もちろん、土地勘があるとなにかかわらず、作品に描かれる土地についてよく調べ、客観的に読むスタンスが重要です。とはいえ、具体的なイメージが読解の助けになることは疑いありません。全時代を通して広く文学作品の舞台となった京都の地で学生生活を送っていくことの豊かさを、教える立場になってはじめて実感した次第です。

最後に、僭越ではありますが前任の先生方のことを少しだけ書かせていただきたいと思います。

井上先生追悼文

井上博嗣先生

田上 稔

私が大学院に進学し、秋成の浮世草子を研究対象に選んだ際、まずはじめに参照したのが、浅野三平先生のご著書『上田秋成の研究』（おうふう、一九八五年）の第二章「浮世草子研究」でした。秋成の浮世草子の素材や、代表作『雨月物語』に至る作風の変化など、現在も覆ることのない重要な指摘を含むご論考であり、研究を始めたばかりの私にとって、浅野先生のご研究を知ることがスタート地点の一つであったように思います。

また、私の前任でいらつしやった山崎ゆみ先生には演劇関係のご研究とともに『当世芝居気質』作者考―半井金陵は並木莊治なり』（芸能史研究）一七四号、廣瀬千紗子氏と共著）の御論があります。並木莊治は現在私が研究対象としている大阪のモデル小説諸作品とも近い位置にあった人物です。山崎先生に直接お目に掛かり、お話をさせていただくことは残念ながらありませんでした。本誌一七一号に山崎先生のご追悼のために寄せられた言葉の数々を拝見し、学生への細やかなご指導の様子、学生や同僚の先生方に愛されたお人柄が偲ばれます。いま、浅野先生と山崎先生の二名を挙げさせていただきましたが、学恩ある多くの先生方が教鞭を執られた本学にて、研究と教育に携わることによる引き締まる思いであります。私自身にできることを模索しながら、精進していく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

一九九五年の一月下旬、井上先生から、お電話を頂戴しました。当時、私は兵庫県西宮市の大学に勤務しており、同市に住まわしていました。一月一七日に発生した大地震で不通になっていた私の自宅電話が復旧した直後に、井上先生から、お電話を頂戴したのであります。

この上なく御懇切なお言葉を、戴きました。「四月からお待ちしているから」と、仰って戴きました。この年の四月から、私は京都女子大学に勤務することになっておりました。

井上先生の御指導のもとで本学に勤務させて戴くようになって、先生について驚かされることが続きました。

まず、学生指導におかけになる、並外れた熱意。ほとんど毎日、早朝から夕刻まで、学生さんの質問等に対応されていらつしやいました。時に厳しく、学生を諭されるお姿も屢々拝見しました。もちろん、授業の準備にかけられていた時間と労力が膨大なものであることも、私は間もなく知ることとなりました。

教室運営に發揮される、あまりに優れた指導力。当時、四年制

大学と短期大学部との二つの教育組織を、「教室」という単位で纏め、運営していました。両組織ごとで個別対応が必要な事案も多くあり、偏りのない、難しい運営が求められていました。井上先生をはじめとする当時の先生方は、それを難なく熟されていらつしやいました。

運営といえば、教授会でも、仰ぐべきお姿を拝見し続けました。この当時、学内に様々な混乱が生じており、教授会が紛糾するところが珍しくありませんでした。その中で、要所要所での確なご発言をなさり、混乱の收拾に努めていらつしやいました。「ミスター京女」の異名が巷間に流れていたことを、記憶しています。

長い長い本学ご勤務の後、ご退職になられた井上先生に、私は名誉教授懇談会にてお目に掛かることとなりました。その時も、京都女子大学のこと、国文学科のことで、種々ご心痛になられていることが、お言葉の端々にお窺いできました。「京女のことを、よろしく頼みます」。そのお言葉を、幾度、仰ったことか。

井上先生がごよなく大切にされていらつしやった、この京女この国文学科について、先生に、現在、どのように御報告申し上げますことができるでしょうか。自身の不甲斐なさに、日々、臍を噬む思いでおります。

井上博嗣先生を偲んで

平成十一年度修了 山 二元（旧姓西田）亜 紀

井上ゼミの年間スケジュールは、ほぼ毎年同じであった。井上先生ご自身がそうおっしゃっていたので、間違いない。合宿や旅行、ぶらぶら歩きの行先はもちろん、記念撮影スポットまで、恐らく先生は決められていた。

井上先生は写真を撮るのがお好きだった。出掛ける先々で私達に、「そこに立って。」と指示を出し、にこにこ楽しそうに首から下げたご自身のカメラのシャッターを切られた。そのタイミングはいつも先生の胸ひとつ、いつ撮られたのか分からない事もしばしばであった。そうして後日、きっちりと仕分けた写真を全員に配布して下さった。ありがたく思いつつも、いまひとつ納得のいかない写りに、私達は顔を見合わせてよく苦笑いした。

私は、先生のご自宅で月に一度行われる源氏物語の輪読会にも参加させて頂いていた。十名程のその集まりは、ほぼメンバーは固定されていたが、会の終わりに決まって先生を囲んでの記念写真を奥様が撮って下さった。毎回撮る必要があるのだろうか？と、ふと疑問に思う事もあったが、それは輪読会を締めくくる儀式のように必ず行われた。

先生の訃報を受けた後、私は実家に帰り、久々にそれらの写真を引っぱり出した。輪読会でのものだけでも何十枚とある。どれもほぼ同じ構図、同じメンバーでの写真であったが、服装や髪型、傍らに飾られた四季折々の花などで、不思議と鮮やかにその時々の記憶が蘇ってくる。

真面目で几帳面な性格ゆえ、先生は何十年の間、決まった場所に学生と出掛け、決まったお気に入りスポットで写真を撮り続けてこられたのであろう。しかし、同じ構図の中にあってもそれぞれに違う個性を持った学生と、ひとりひとり真摯に向き合い、親身になってご指導下さった。

国語学者としての井上先生は、形式よりも意味内容を重視した文法に依って、ひたすら丁寧な根気よく、言葉を分析・分類なさっていた。「国語学が服を着て歩いているよう」とも評されていた先生であったが、一見堅苦しく、近寄り難い雰囲気とは異なり、面倒見の良さは国文学科の中でも一番と言えるほどであった。平成十二年、先生のご退職に際して行われた記念祝賀会には、そんな先生を慕うかつての教え子達がホテルの会場にあふれんばかりに駆け付けた。もちろん、私もその一人である。

先生に頂いた膨大な量の写真を見返しながら、これらはいかにも井上先生らしい、と妙に納得して、ひとり笑みがこぼれた。今

のように誰もがスマホで簡単に写真を撮る事もなかった時代、私達が京都女子大学の、井上ゼミの学生として過ごした時間をカチとして残してあげようとして下さっていた先生の優しさが写真に見えたような気がして、今更ながら、改めて、感謝の気持ちが込み上げてきた。

カメラを手に、「そこに立って。」と指差し微笑まっていた井上先生のお顔と、いかにも京都らしいイントネーションで話される優しくやわらかなお声が、今はただただ、懐しい。

井上博嗣先生を偲んで

「紅茶と桜」

平成五年度卒業生 大島 登紀子

大学四回生の井上ゼミは先生の研究室で行われていた。ティーサーバーで紅茶を淹れるところから始まり、紅茶とともに皆が持ち寄ったお菓子を一緒にいただきながらうけていた。確かに授業だったのだが、授業の内容よりも紅茶とともに穏やかに過ごした時間ばかり懐かしく思い出される。

そして奈良吉野の桜から松阪へのゼミ旅行、これは井上ゼミ恒例の行事であった。ゼミ旅行の前から、桜の開花状況が気になっ

ていた。私たちの学年の年は桜の開花が遅かったため、ゼミ旅行の時に吉野の山桜はほとんど咲いておらず、わずかに咲いている桜を見つけて写真におさめた。先生は、「毎年行っているが、これだけ咲いていない年もなかなかない」とおっしゃっていた。満開に咲いている年はさぞ美しい風景だろうと想像すると残念だった。そして吉野の山を下りて次の目的地へ行く時、なぜか先生がおられない。乗り継ぎの時間が迫っているのにどこに行かれないのだろうと心配していると、向こうから走ってこられた。なんとか時間に間に合い電車が出発してほどなく、先生は「この草餅はおいしいんだよ。」と手に持っていた袋の中から草餅を出して皆に配ってくださった。先生がこっそりと買いに行ってくれたことがとてもうれしく、先生のお気持ちとともに皆で美味しくいただいた。

先生はどこへ行くにもカメラ持参で、写真を撮って皆に配ってくださった。先生からいただいた思い出の写真は数えきれない枚数になっている。いつも「はい、そこに並んで」と先生がおっしゃると、順番に並んだ。そして、一人一人の写真、ゼミの集合写真など、本当に多くの写真を撮っていた。あの頃はネガフィルムで現像と必要枚数の焼き増しをする時代だったので、その作業だけでも大変だったと思われる。

さて、卒業後である。吉野の桜が咲いている風景をどうしても皆で見たいという気持ちが強かったので、私たちは卒業後に再び訪れる計画を立てた。先生は多忙なスケジュールにもかかわらず、参加してくださった。そして卒業後の第一回ゼミ同窓会で、吉野の満開の桜のもと私たちはゼミ旅行を達成できた。その後もゼミの同窓会と称してよく旅行に行った。関東で就職した友人が企画してくれ、東京へ旅行に行ったこともある。いつも先生は私たちとともに来てくださった。

私たちは、桜とご縁で桜の咲く時期に集まることになっていた。毎年四月の第一日曜日に同窓会を開催すると決め、京都で集まるが多かった。先生は「私が参加できなくなっても、皆が集まって、同窓会を続けなさい。」とおっしゃっていた。先生が外出されるのが厳しくなってきた時期には、皆で集まって食事をしてから先生のご自宅へうかがい、先生とお話をして過ごした。先生は何年たっても、当時のまま私を下の名前で呼んでくださった。多くの卒業生をかかえていらっしゃるのに、一人一人名前を憶えてくださっていることがうれしかった。卒業後何年たっても、ゼミの同窓会は学生時代に戻れる貴重な時間であった。

コロナ禍で世の中が外出自粛になってからは、先生のお体を考え先生にお会いすることも控えた。コロナが落ち着いたら同窓会

を再開、先生とまたお会いできると思っていたのだが、それは叶わなかった。残念でならない。でも私の中で先生はずっとそこにいらっしやる。先生からは学問だけでなく、さまざまなことを教えていただいた。そのおかげで今の私があると思っっている。

井上博嗣先生、本当にありがとうございました。

井上先生と過ごした日々を想う

平成七年度卒業生 望月志乃

入学式のオリエンテーション終了間際に、井上先生はこうおっしゃいました。「桜が見頃なので、一緒に見に行こう。希望者は後で教授室へ来なさい。」私は早速、顔見知りとなったクラスメイトと教授室を訪ねました。しばらく待っても他の学生は現れず、段々居心地の悪さを感じ始めた頃「もう誰も来ない。行こう。」先生はきつぱりとおっしゃり、問答無用に三人で出発しました。私のアルバムには、いかにも田舎から出てきた風の女学生がはにかんでいる写真があります。白川の枝垂れ桜の下、私達の特別な春を先生に写真を撮って頂き京都での生活が始まりました。今から三十年以上も前の事です。

井上先生には短国のアドバイザーとして、大学へ編入後は井上ゼミを専攻し、お世話になりました。そして卒業後は京都女子学

園に就職し、国文研究室の事務員として先生の近くで三年間働きました。先生は穏やかにゆっくりとお話しになる一方で、その柔和なお顔とは裏腹に、時に甘えを許さない厳しい面もありました。先生の国語学の講義は難しく、最初に達筆な板書を見た時の衝撃たるや、クラスがどよめきました。当時、私は入学早々に女坂で勧誘された部活の競技ダンスに熱中するようになり、編入したにも関わらず興味の大半が学業以外に傾いていました。卒業論文は先生のおかげで充実感を持って取り組めたものの、その出来は恥ずかしいばかりで、口頭試問では矛盾点をK先生に指摘され、答えにつまる私を見かねて「まあまあまあ」と助け舟を出してくださり何とか乗り切りました。私という人間をよく知ってか、随分厳しかった先生はそうされたのでしょうか。本当に先生は何でもお見通しでした。

それに井上先生は、講義以外でも何くれとなく私達の面倒を見てくださいました。短大では休日にはぐらぐら歩きで京都散策をし、大学では一年に一度のゼミ旅行で吉野・松阪や那智勝浦へ皆と旅行をしました。健脚な先生の旅程は徒歩の区間も多く、私達はすつくつと背筋の伸びた先生の背中を追って、早足で必死について行ったものです。大学卒業前には先生の神泉苑のお宅で、奥様に鍋料理をふるまって頂いた事もありました。そして必ず写真を

撮って私達に記念にくださいました。卒業後でさえも先生はゼミ生を集めて食事会を設けてくださいました。私はJ校舎の雑木林を横目に恵まれた環境で仕事をする日々でしたが、ゼミの友人達は社会に採まれていました。そんな皆の苦勞話を先生は静かに聞いておられました。

私は七年間も先生にお世話になりましたが、転職を理由に国文研究室の職を辞する際、事前に先生に報告していませんでした。退職を聞いた先生が研究室へ来られ、そのお顔を見た時に大変な不義理をした事に気がつき沈黙の時が流れました。先生の定年退職まで後一年のタイミングでした。その後、先生の「ご退職祝賀会」が卒業生の有志により催されたのですが、新しい職場で充実するも忙殺される日々を送っていた私は参加できませんでした。「君が来なかつたのはよほどの事だと思った。」何かの機会でお便りを出したその返信を見て、うなだれました。

以後、先生とは年賀状の挨拶のみとなり、その後転職先を辞めた事や自分の近況を一年に一度報告するようになりました。私にとって人生の一大事でも、先生はいつも鷹揚に構えた返事で私は逆に気が楽になりました。そうやって報告できる先生がいることがとてもありがたい事でした。地元に戻り旅行会社の職を得た後、かつてゼミ旅行で行った旅先をお客様の為に地図でたどる機

会もありました。当時呑気について行った旅程はよく考えられていて、吉野の桜を満開の時期に訪れたのはただの偶然ではないし、那智勝浦の宿で洞窟風呂から太平洋の荒波を見て、皆と歓喜したホテルはとても有名なホテルだったと知りました。伊良湖岬でもじもと「ヤシの実」を唄った事は生涯忘れえぬ、二度と帰らぬ瞬間だったと今になり心に沁みています。私達の人生の何歩も先を行く先生は全ておわかりで、慈愛に満ちた学生時代を与えてくださいました。かつて若かつた私は、当たり前のように先生からいただくばかりで、その事に気づく事もなく長い時が経ちました。先生と過ごした日々を思い返すにつけ、感謝の気持ちは止めどもなく、若かりし日の自身の不義理をお詫びしたい。そう思うばかりです。

先生の訃報に接し、鮮明に思い出したのはなぜか一番遠い記憶であろう、あの白川の枝垂れ桜の夕暮れでした。憧れの京都でこれからの学生生活に胸を躍らせていたあの春。温かく懐かしい思い出が私の心にせつなく広がりました。ただただ、静かに涙が溢れてきます。

『万葉集』巻十七「追和太宰之時梅花新歌」の解釈

—「追和」の在り方と三九〇四番歌の解釈を中心に—

野 添 梨衣奈

〈論提要旨〉

本論は、『万葉集』巻十七の三九〇四番歌「梅の花何時は折らじと厭はねど咲きの盛りは惜しきものなり」（以下「検討歌」と表記する。）を中心に「太宰の時の梅花に追和する新しき歌六首」（巻十七・三九〇一〜三九〇六）の自己の解釈について述べたものである。下の句「咲きの盛りは惜しきものなり」は、梅の花が咲いている盛りの時期について「折らないのは惜しいものだ」（a）という解釈と「折るのは惜しいものだ」（b）という解釈に分かれている。本論では、以下の観点から三九〇四番歌が「折らないのは惜しいものだ」という意味であることを述べていく。

まず、検討歌の先行研究についてまとめると、b説を探るものが多数である。しかし中には「追和」の観点について深く触れていないものもある。本論は、検討歌含む六首はそれぞれ一首ずつ追和元の歌があるという立場に立つ。そこに加藤清氏・大久保廣行氏の論を参考にして、検討歌含む歌群における「追和」とは、

それぞれ追和元の歌に賛同し、更に自己の立場で詠もうとする意気込みが表れたものであるのだという見解を加える。

また、「太宰の時の梅花に追和する新しき歌六首」は、宴の歌に追和したものである。検討歌の追和元の八二〇番歌（巻五）には「かざし」という集団性の強い言葉が使われており、b説に立つなら検討歌も当然梅をかざしにすることを推奨しているはずである。検討歌に続く三九〇五番歌（巻十七）では「遊び」という集団性が強い語が使われており、追和元に対する同調する姿勢が強い歌である。検討歌はこれと同じ立場に立っていると考える方が自然であり、梅を折ってかざしにすることを強く推奨しているのである。

以上のことから、検討歌はb説の立場で解釈するべきである。

〈卒論執筆体験記〉

私が検討歌に興味を持ったきっかけは、一回生の時に受けた講読上代の授業です。本人作の歌が殆ど残っていないにもかかわらず、『万葉集』に掲載された数少ない歌はどれも個性が光っており、尚且つ家持が大規模な挽歌を詠んでその死を悼むほどに彼の人生に大きな影響を与えたと考えられる、家持の弟書持に強く興味を惹かれました。

歌も研究もあまり多くない書持の作品から疑問点を絞り出すこ

とは、それほど大変な作業ではありませんでした。特に検討歌に
関する論文は非常に少なく、整理するのにも時間がかかりません
でした。しかし、解釈が両極端に分かれた歌というだけあって、
研究方法が既存の研究の真似事のようになってしまう危険性があ
り、独自の観点で検討を進めるにはどうすればよいかについて
は、随分と悩みました。時間と原稿枚数が許されるのであれば、
ありとあらゆる観点から検討し直したいというのが正直なところ
ですが、現実には、知識面においても原稿の制限枚数においても、
書けることに限りがあります。手に入れた情報を如何にして取捨
選択するかは、私にとって大きな課題でした。

そんな中で、担当の先生が、非常に親身になって相談に乗って
くださったことは、私の解釈を固める上で大変大きく影響したか
と思います。少しでも分からないことがあると逐一先生にメール
でご連絡申し上げていましたが、その度に変な丁寧なアドバイスを
下さったので、比較的早い段階で研究の方向性を決めることが
できました。その先生には今でも感謝しております。

研究を進めていく上で大変だったことは、注釈書の整理です。
万葉集という多くの人の目に触れてきた歌集を題材にするという
ことは、それだけ多くの注釈書が存在するという事です。検討
歌含む「太宗の時の梅花に追和する新しき歌六首」が収録されて

いる巻十七だけでもその注釈の数は決して少なくはなく、解釈は
勿論、著者や発行社の把握にも労力がかかりました。

しかし、各々の注釈書の著者がどのような視点を以て検討歌を
解釈していたのかに多少なりとも触れることができたのは、とて
もよい経験になったのではないかと思います。梅の枝を折るか折
らないかについての判断は勿論のこと、その時代、個人が「追和
梅花新歌」にどのような感情を抱いているのか。私は好きで
一九七四番歌を研究対象として選んだので、批判的な注釈は見
て悲しくもなりましたが、その研究家の好む歌の傾向を先生に
解説して頂くなどして、何故彼がこのような解釈に至ったかを想
像してみるのも又、面白いものがありました。

この一年間で私が学んだことは、「整理整頓をすること」と
「現在自分が誰の、何という資料を参照しているかをきちんと把
握すること」です。一つ目は、コピーした注釈書を散乱させた結
果、どれが何の注釈か分からなくなってしまうことから学びま
した。資料のコピーは番号を振るなどして、適切に扱っていき
たものです。

そして二つ目について、これは私が論文提出直前になって、中
心的に扱っていた注釈書を別ものものと間違えていたことに気づい
た時に学んだことです。数巻に渡る参照だったので、慌てて奥付

のコピーを取り直し、参考資料を書き換えて事なきを得ましたが、気づかず提出していたらと思ふと未だに恐ろしくなります。なるべく余裕をもって書き終えることと、提出前に必ず隅々まで見直しをすること、卒論に限ったことではありませんが、この二点が少しでもミス減らすことに繋がるのです。

私は、卒論を通して、様々なことを学びました。万葉歌の美しさは勿論のこと、成果物を提出する上で必要なこと、よりよい物を作り出す秘訣。それらは全て無駄になることなく、成長に繋がったのではないかと思っています。現在卒論を執筆中の方も、これからの方も、卒論を、ひいては大学生活を通して、多くの学びがあることを心より願っております。

『古本説話集』上巻第三十八話「樵夫詠隠題事」成立考

—木こる童と散る桜—

金尾 涼 乃

〈詠文要旨〉

『古本説話集』は題名をはじめ、編者や成立年等、不明な点の多い説話集である。成立年については現在、「大治末年（一一三〇）頃」「宇治拾遺物語」と前後する頃、「建久年後半（一一九五）以降、建永年間（一二〇六～〇七）以前」の三つの説があり、編

者は「男性」「源俊頼や藤原俊成の娘と同じ立場にある人物」「俊成を中心とした歌人グループと深く関わっていた人物」と言われている。『古本説話集』はほとんどすべてを何らかの先行文献によっていると考えられており、また上巻第三十六話「樵夫詠隠題事」は、もとは貴族社会での歌をめぐる伝承、歌語りのひとつかとも考えられている。つまり、和歌に近い場での口語りが散佚文献で文字化され、やがて『古本説話集』に収められたという流れが想定できる。私は上巻第三十六話「樵夫詠隠題事」の成立過程や出典を、詠み手設定と和歌の素材に着目して考察した。

本話は和歌説話であり、和歌の詠み手は「木樵る童」である。管見の限り「木樵る童」という表現が本話以外に例がないことから、まず、木こりの子どもが文学作品・美術作品の中でどのように描かれてきたのかを調査した。結果、薪とりの子どもとして遊びながら自然と親の仕事を手伝う山村の子どもの姿があり、その姿は孝行心と結び付けられることもあった。

次に「木樵る童」の詠んだ和歌に着目した。この和歌は『藤六集』の物名歌をもとにしていると言われる。本話の第二句・第五句は『藤六集』の歌と異なるが、『新編国歌大観』『新編私家集大成』中で唯一、『栄華物語』巻十四「あさみどり」にて遅咲きの桜を待つ気持ちを詠んだ和歌「咲き咲かず……」にのみどちらも

共通する。

また、本話和歌は散る桜を詠んだ歌であり、先行研究では「木を詠む職業としてふさわしい」と述べられている。たしかに当然そのように思えるが、木こりと「桜」の組み合わせに限った調査はなされてはいなかったため、木こりと桜が同時に描かれる文学作品や和歌を収集し、比較検討した。初出は『古今和歌集』仮名序の「大伴の黒主はその様、卑し。言はば新負へる山人の花の陰に休めるがごとし」である。また山桜周辺の存在として木こりそのものを桜の側におく発想は、数は少ないものの平安中期からあるもので本話が特別新しいわけではない。従来「ものの情知らぬ」はずの木こりが桜とともに詠まれてきた背景には『古今集』大伴黒主評の取り込みもある。院政期では歌林苑を中心に、花を求めて木こりに尋ねるといふ「問」を含んだ新しい詠みが流行する。それは桜を待ち遠しく思う気持ちや、遅咲きの山桜を羨む気持ちから生じたものである。鎌倉初頭からは山桜自体が持つ様々なイメージと組み合わせられて詠まれるようになり、木こりと桜の詠まれ方は拡大する。黒主評の山人像と「ものの情知らぬ」山人像は共存しつつ、やがて『志賀』のような謡曲を経て、黒主評と山人像は強く結びついていく。

特筆すべきは院政期に詠まれた『林葉和歌集』逢樵天問花歌林

苑「咲きさかず……」をはじめとした十一首の歌群である。歌林苑関係者を主とする俊恵・頼政・覚性・公重・重家・師光・小侍従・西行が詠んだこの歌群は、木こりに桜の開花・在処を尋ねる歌として共通する。一方、本話は「木樵る童」が散る桜を問う構成で、院政期の歌群と対の構造が見えてくる。よって本話は、木こりに桜の開花を尋ねるといふ院政期に詠まれた歌の趣旨を逆転させ、木こりに散る桜を尋ねさせるという発想が背景にあったのではないかと考えた。

歌林苑会衆の賀茂重保・平経正は俊成の弟子でもあった。また俊成自身や俊成の弟子平忠度は先行研究で歌林苑歌人との幅広い交流が指摘される他、定家が判者をつとめた『宮河歌合』は西行亡き後、俊成に師事した家隆に伝えられている。このように歌林苑関係者周辺の人々は、先学が『古本説話集』編者に指摘する人物像と近い場に存在する。歌林苑周辺の歌を源流にもつ説話を、『古本説話集』編者が撰取することもありえよう。歌林苑関係者や歌林苑関係者の歌を受容した人々の間で、本話が誕生・口承され、やがて散佚文献によって文字化。『古本』編者はそれを参考にした。このようにして本話は『古本説話集』に収められたのはなかるうか。また、この場合『古本説話集』の成立年代は「宇治拾遺物語」と前後するころ。「建久年後半以降、建永年間以前

が該当する。

〈卒業論文執筆体験記〉

卒業論文の執筆を終えて、私は「もつと余裕をもって作業をしておけばよかった」「もつと広い分野を学んでおけばよかった」と後悔しています。

余裕をもって設定したはずの予定でしたが、把握していない先行研究が見つかったり、急に体調を崩したり、必要な情報集めるのに想定以上の時間がかかったり、論文を文字に起こす作業が語彙不足で想像以上に進まなかったりとどんどん後ろ倒しになって、やつとこのことで卒論が完成したのは締め切りの前日でした。何が起こって予定がずれるかは分かりません。卒論の予定を立てるときは十分すぎるくらい余裕を持たせた方が安心かと思えます。

また私は、来年受けよう来年受けようと思っているうちに、必修科目との兼ね合いや自身のスケジュールの都合で、和歌関連の講義をあまりとることなく大学生活を過ごしてしまいました。卒論では複数の和歌を扱っていますが、卒論のテーマを決めた時にはまさかこれほどまで和歌の分野に踏み込むとは思っていませんでした。そのため、知識不足が故に図書館に通い詰め、締め切り直前にかかなりの時間を使ってしまいました。後回しにせずとれるときに、いろいろな先生方の講義を出来る限り満遍なく受けてお

いた方が、今後思わぬ方向に手がかりが見つかった時に力になるのではないかと思います。

余裕をもって、体調に気を付けて、どうか私のような後悔をしないよう頑張ってください。

泉鏡花「琵琶伝」の鸚鵡

— 鸚鵡琵琶の役割とその典拠 —

濱谷美里

(論文要旨)

泉鏡花「琵琶伝」は、明治二十九年に『国民之友』に掲載された鏡花初期作品の一つである。同年『太陽』に掲載された「海城発電」とともに昭和十五年から昭和十七年刊行の岩波版『鏡花全集』には収録されなかった。これは、「当時の軍国的風潮下に反軍反戦的色彩を帯びていると見られたためであろう」とされている。

しかし、脱營といった反戦的な要素は見られるものの、本作の主題は「純愛の勝利であり、その骨子は愛人を殺された女の復讐譚とみるべき」と言われるように、「琵琶伝」はヒロインであるお通の恋と復讐を描いた作品である。

本論文では、作品中でヒロインのお通とその想い人である謙三郎の恋を仲立ちし、謙三郎の死後にお通を復讐へと導くなど、重

要な役割を担う鸚鵡琵琶に着目し、鸚鵡が踏襲しているもの、「琵琶」という命名の理由について、その典拠と言える新資料を交えて再検討することを目的とした。

第一章では、まず「琵琶伝」作中の鸚鵡琵琶の描写について検討し「珍重される価値あるもの」「純白という色」「人真似をして人語を話すこと」「お通・謙三郎の情交を媒介し、人間のような思考・行動をしていること」「死者の意を体現する怪奇的・非現実的要素を持つ」という五つの特徴に分類した。

そして第二章では、同時代評から鸚鵡琵琶の特色のうち五つ目の死者の意を体現するという怪奇性が非難されてきたこと、先行研究では、鸚鵡琵琶の役割の検討が不十分なまま評価がなされてきたことを指摘した。先行作品で踏襲されていたもの、典拠の明確な指摘等の作業がなされていないために、鏡花の独自性も明確になっっている。

この問題点を受けて、第三章・第五章で古典文芸や同時代資料から鸚鵡というモチーフがどのように描かれているのか検討し、第四章では鸚鵡琵琶の典拠に関する新資料として、『新語園』を指摘した。『新語園』等から殆ど鸚鵡琵琶の特色が一致する一方で、鏡花の独創として残ったものは、五つ目の死者の意を体現するという怪奇性であった。

鸚鵡琵琶の怪奇性にこそ鏡花の独自性があるのならば、同時代において批判の中、怪奇を推し進めた『青年文』の批評が本作の核心をつくものである。この批評も後押しとなって、その後幻想作家としての道筋へと舵を切ったのなら、「琵琶伝」は鏡花の作品史上の転機となった作品と言える。

（卒論執筆体験記）

私の卒業論文執筆は苦労もありましたが、それ以上に「文学研究のおもしろさ」を感じられた貴重な体験でした。卒論の執筆がおもしろかった。昔から文学が好きなんだと思われがちなのですが、私はもともと授業以外では文学作品にほとんど触れてこなかった人間です。このことも踏まえて、私がどのように卒論に向き合ってきたのかを先輩の皆さんに参考にしていただければと思います。

私が卒業論文執筆にあたって一番苦労したのは、「自分の研究テーマを見つけること」でした。なぜかと言うと、私は大学四年の夏頃までテーマが定まっていなかったからです。漠然と泉鏡花の怪異について知りたいと思っていたので、何をするべきか先生に相談したところ、明治二十年代の鏡花初期作品を読んだ方がよいとご教示いただきました。私は夏休みを利用してその通りに作

品を読み進め、先行研究や資料をできるだけ集めて研究史の流れをまとめていました。

「研究テーマ選びが難航している方は、「資料と先行研究の収集」に時間をかけて取り組んで欲しいです。続けるうちに、どの作品がどのように研究史上に位置付けられているのか、まだ研究されていない余白はどこにあるのか、やるべきことが少しだけ見えるようになってきます。この作業のおかげで、私は自分の研究テーマを見つけることができました。大学四年の夏にするには時間と根気のいる作業だと思えますので、できるだけ早い時期に実行して欲しいです。地道ですが必ず結果に結びつく作業だと思います。また、研究テーマ選びに関しては二点ほど気を付けた方がよいと思うことがあります。

一点目は「自分が興味のある研究テーマを選ぶこと」です。卒業論文は長い間付き合うものになるので、根気強く自分が向き合えると思うテーマにした方が意欲的に取り組めると思います。自分の好きなものなら良い成果が出せるとは限らないと思います。が、大学生活の集大成となるように、悔いの残らないテーマ設定にして欲しいです。

二点目は「大きすぎる研究テーマにしない」ことです。私は最初、漠然と怪異について研究したいと思っていました。時間が

限られている中で「怪異」という大枠をテーマにしてしまうとかなり研究が難しいです。怪異の中でも、どの時代のどの作品なのか、さらに言えば作品のどの部分なのか、できるだけ扱うものを絞った方が密度の濃い研究になると思います。

そして、研究テーマだけでなく卒業論の内容をより良いものにするために、「先生への質問」の時間を大事にして欲しいと思います。私はゼミでもそれ以外の日でも先生にアポを取って質問をしていました。私は量で攻めるような調べ方をしていたので、私が没頭している間に見落としてしまったことや、論理的な飛躍がある箇所についてのご指摘をいただくことができ、先生の冷静で確実な視点には何度も助けていただきました。

以上のように、「研究テーマ選び」「資料と先行研究の収集」「先生への質問」の三点が卒業執筆時に気を付けて欲しいポイントになります。

そして最後に、卒業論文を提出する際に重要なのはメンタルだと思えます。執筆は根気のいる作業なので、どんな時でも状況に悲観しすぎず前向きに頑張ってください。私は提出の前日に図書館に籠って補注に新しい資料を追加していましたが、そこまでやっても提出後に後悔が残っています。後悔が残っても文学研究がおもしろいと思えたのは、最後まで自分が諦めずに卒業論文に

向き合えたからです。真摯に取り組んだことで、自分が選んだ研究テーマについて、その一端に迫ることができました。

みなさんも全力で自分の興味関心に没頭してください。応援しています。

国木田独歩「恋を恋する人」の表題について

——「恋を恋する」という表現に着目して——

藤野 七緒

〈論要旨〉

国木田独歩「恋を恋する人」は、「彼女(あのをんな)」との失恋を経験した主人公・大友が、その傷に同情してくれた女性・お正と、四年の時を経て再会し、お正との会話の中で自分が「恋を恋する人」であったと自覚する話である。本論文で取り扱うのは、表題「恋を恋する人」の意味である。先行論文や同時代評の中には表題「恋を恋する人」の意味が作品本文中に現れていないとの指摘があったが、果たしてその指摘は正しいのだろうか。この疑念をもとに、「恋を恋する」というフレーズに注目し、「恋を恋する人」の意味について検討した。

第一章では、「恋を恋する人」本文を検討した。本文の中に、「恋を恋する人」という表現を大友に対して使っている箇所があ

ることから、表題の「恋を恋する人」は主人公・大友のことを指すと考えられる。この確認と合わせて、「恋を恋する人」である大友の恋とは、何を指すのか考察を行った。注目するのは、お正と「彼女」という二人の女性に対する大友の気持ちが解説されている部分である。お正に対する大友の気持ちは、地の文で恋ではないと否定され、また「恋」という言葉を使って表現された例が一つもない。対して、「彼女」との交流は、「失恋」「恋の傷」といったように、「恋」という単語が用いられている。大友の「恋」とは、お正のものではなく、「彼女」との恋のことを指していると考えられる。

第二章では、「恋を恋する人」以外で独歩が「恋を恋する」という表現をしている作品の検討を行った。該当する作品は「夫婦」のみであった。「夫婦」は、学生時代に恋に落ちた坂本と千代子夫妻が大人になってから結婚するも、気まずさが発生してしまったという話である。「夫婦」本文中で坂本は、その原因が坂本・千代子共に「恋を恋する」状態で結婚してしまったことであると分析している。ここでの「恋」とは、坂本・千代子が学生時代に自分たちが体験した恋のことを指す。「夫婦」において、「恋を恋する」という表現は、過去の実体験の恋に対して恋をしているという意味で使用されているのである。独歩が一貫性を持って

「恋を恋する」という表現を使っていたならば、「恋を恋する人」の「恋を恋する」もまた、大友が過去に体験した恋に対して恋をしたという意味であると考えられる。「恋を恋する人」である大友の「彼女」への恋は、大友が過去実際に体験した恋である。

第三章では、同時代における「恋を恋する」という表現の使用例について調査・分析結果を示した。分析しきれなかった資料もあるが、本論文中では大きく二種類に分類し紹介した。一種類目は、実態のない恋に対して恋をしているという意味で「恋を恋する」が使用されている例である。一種類目に分類した例の特徴は、「恋を恋する」状態を本当の恋をしている状態として扱っていないこと、「恋を恋する」人物が恋しているのは実在する特定の誰かではなく漠然とした「恋」のイメージであることである。「恋を恋する人」「夫婦」といった独歩作品における「恋を恋する」の使い方は、この二点の特徴いずれにも当てはまらない。二種類目は、西洋の思想家ラ・ロシュフコーの格言「女は初恋では恋人を恋し、次からは恋を恋する。」(二宮フサ訳『ラ・ロシュフコー箴言集』より引用)を取り扱っている資料である。二種類目の「恋を恋する」使用例の特徴は、「恋を恋する」人物の性別が女性であること、「恋を恋する」の「恋」が「恋を恋する」人物が過去に実際に行った恋であることである。一つ目の特徴について

ては「夫婦」の坂本や「恋を恋する人」の大友が男性であることから当てはまらないが、二つ目の特徴は、過去に実際に行った恋に対して恋をしているという点が一致している。独歩作品における「恋を恋する」の使い方の背景に、ラ・ロシュフコーの格言の影響を受けている可能性がないとは言い切れない。

第一章から第三章までの検討結果をまとめると、独歩は「恋を恋する」という表現を、過去に実際に体験した恋を欲しているという意味で使っている可能性が非常に高い。「恋を恋する人」である大友のしていた「恋」がかつて「彼女」と行ったものであると考えるならば、「恋を恋する人」は大友が過去に行った「彼女」との恋を求めていたことをお正との会話の中で自覚する話と読めるようになる。従って、表題「恋を恋する人」の意味も本文中に現れていると言える。

〈卒論執筆体験記〉

私が卒論の題材にする作品を選ぶにあたって重視したのは、「話の短さ」「先行研究の数の少なさ」でした。長い小説を正確に読むことと先行研究の論旨を理解することが苦手だと三回生までの講義で痛感していたからです。私の場合、まず青空文庫で作品を読み、その後気になった作品のタイトルを国文学論文目録データベースやONLINEで検索し先行研究の数を数えました。いくつか

試してみた結果、先述の条件を満たしたのが国木田独歩の「恋を恋する人」という表現に焦点を絞ったのは、後期が始まってからしばらくしてからのことでした。この決断をした要因には、ゼミでレジュメを発表した際、峯村先生から助言を頂いたことと、その頃やろうとしていた登場人物のモデルに対する独歩の考え方や前妻・信子との恋愛体験の作品への反映についての調査・考察が上手くいっていないことがありました。

卒論は、手抜きはダメにしても、気負いすぎないことも大事だと思えます。百点満点の冴えた主張でなくともいい、くらいの心持ちで私は臨んでいました。卒論を書きあげるのには苦勞も多し、先行きの不安や辛さを感じる場面も度々あると思います。どうか、頑張ってください。応援しています。

優秀論文発表会に参加して

三回生 荒木桃子

今年の優秀論文発表会で、私は学会委員として司会進行を務めさせていただきました。先輩方のご論文の発表の場での司会という役割に、非常に緊張しましたが、先輩方のご発表、先生方からのご質問、卒論の執筆体験と、普段あまり聞く機会がないお話を

聞くことができ、非常に有意義な時間で参加できて良かったと思えます。

先輩方が壇上で堂々と発表される姿が印象的で感銘を受けました。「自分の調べたことを発表する」といった機会はあまり多くなく、私はいつも緊張でうまく話せなくなってしまうです。ご自身の研究の成果を自信をもって発表される姿から、卒論の執筆に熱心に取り組まれてきたことが伝わってきました。そして、先輩方のご発表を聞き、些細な疑問点や気になることから研究を深められていると感じました。作品を読む際には、細かな点も見逃さないよう丹念に読み、「もつと知りたい」、「ここが気になる」という自分の感性を大事にすることが重要で、作品と丁寧に向き合う姿勢が必要だと思いました。

また、執筆時の体験やアドバイスもいただくことができました。「和歌について学ぶ授業をあまり受けなかったが、卒論で和歌の解釈が必要になり苦労した」、「提出が直前になってしまったので、ゆとりをもって提出できるような気を付けた方がいい」などリアルな体験談を聞くことができ勉強になりました。お話を聞いて、履修登録の時間を振り返ってみると、つい自分が興味のある分野の授業ばかりを選んしまい、偏りがちだったと気が付きました。卒業論文ではどのような知識が必要になるか分からないの

で、今まであまり関心がなかった時代や分野の勉強も、積極的にしていこうと強く思いました。大変な執筆活動を乗り越えてこられた先輩方からの説得力のある言葉に、卒論執筆に向けて気が引き締められました。先輩方の堂々とした発表を聞き、「自分も誇れるような卒論を書きたい」と思いました。今回の優秀論文発表会で得たものを活かして、卒論の準備、執筆をしていきたいです。

優秀論文発表会で学んだこと、感じたこと

三回生 上 中 咲 幸

令和五年度優秀論文発表会は、教室での対面開催でした。一度オンライン開催の優秀論文発表会に参加したことがあるのですが、やはり印象が異なりました。その一つに、対面開催は聞いている側が見える、ということがあります。オンラインではどうしても話し手と私の一対一に感じてしまいましたが、教室では私と同じようにメモを取る学生の様子が見えます。程よい緊張感と連帯感を感じながら沢山のことを学ぶことができました。以下にほんの一部ですが学んだこと、感じたことについて記しておきたいと思います。

まず、卒業論文を完成させるには大量の資料を調査していく必要があることを学びました。今回の発表会では時間の関係上省略

されている部分も多くあったと思います。しかし配付された資料を見ると沢山の参考文献が載せられており、その量に驚きました。また、発表を聞いていると資料に載せられている以上に広い範囲を調査されていること、細かく読み込まれていることが分かりました。これまで書いてきたレポートとは明らかに違うことを改めて認識し、多くの参考文献を読むためのスケジュール管理や文献自体の管理の必要性を感じました。

次に、先行研究を読むことの大切さを知りました。テーマを決めてから先行研究を読んでいくものだと思いますが、先行文献はテーマや疑問点探しに役立つということを学びました。私はまだ卒業論文のテーマが決まっていないので、今から興味のある内容の先行研究を讀んでいこうと思います。

以上、一部になりますが優秀論文発表会で学んだこと、感じたことを記してきました。今回の優秀論文発表会参加を通して、どこかまだ遠い存在だった卒業論文とぐっと距離が近づいたような気がします。今回学んだことを十分に生かし、自分でも満足いく卒業論文を完成させたいと強く思いました。

最後になりましたが、お忙しい中優秀論文発表会に参加してくださった先輩方、本当にありがとうございます。

優秀論文発表会に参加して

三回生 松下 渚沙

私は今回初めて優秀論文発表会に参加しました。一、二回生の時はまだ卒業論文なんて先のこと、聞いても今の知識量では理解できないと思って参加していませんでした。しかし、今回の発表者の中には一回生の時から卒業論文のテーマを決めていた方がいらっしやって、これまでの甘えと逃げを反省しました。

また、発表者の中にはこれまであまり触れてこなかった分野で卒業論文を書くことになり、まずその分野に関する知識を集め理解することに時間がかかってしまったという経験を話してくださった方もいました。振り返ってみると私も前期に履修した分野だからという理由で後期も同じ分野の履修をしていることが多く、あまり触れていない領域があることに気が付きました。私の中で特に上代はその自覚があり、今回の優秀論文発表会でも上代の卒業論文の発表は私自身の知識量が足りず、資料と検討内容を追うことに必死で内容をしっかりと理解できたとは言えない結果になってしまいました。自分の興味、関心のある分野が今まで学んでこなかった分野と関わる可能性は多大にあり、学んでこなかったがゆえにその関係性に気が付けないかもしれないと考える

とこれまでの自分の行動に後悔しかありません。

今回の優秀論文発表会で私が特に参考になった点は二つあり、一つは卒業論文のテーマを先行研究の中から見つけるというものでした。そのことを伝えてくださった発表者の方は興味のある分野の先行研究を数多く読み、その中から矛盾点や疑問点を探し、研究テーマにしたとおっしゃっていました。これまでの授業でもレポートのテーマに悩み、私が思いつく疑問点なんて誰かが研究し、答えを導いているに違いなく、新しい疑問点が見つかるわけがないと考えていた私には目から鱗の考えでした。何もないところから考えて、先行研究と照らし合わせるのではなく、先行研究から違和感を探し出せばいいのだと知ったからです。この考えは日々の授業のレポートでも活用し、テーマ探しに慣れていきたいと思いました。

もう一つは、各発表の後にある質疑応答と担当の先生の講評です。私は発表を聞いて、内容を理解するだけでした。しかし、先生方はこれまでの知識やご経験から疑問点や検討されていない項目の調査をご指摘され、まさに先ほど述べた先行研究から疑問点を探す方法を目の当たりにしました。現代を生きる私たちには何の疑問も持たないことでも作品ができた時代は常識が違ったかもしれない、今も残っている言葉だけれど本当に当時の人々が今と

同じ意味で使っていたのか。そのような視点で作品を読んでみることで今まで気が付かなかった違和感に気が付くのもかもしれないと思いました。

これらの学びをいかし、卒業論文の準備をしていきたいと思えます。発表してくださった先輩方、貴重なお話をありがとうございます。

新入生歓迎行事 能楽鑑賞会観覧記（五月二十七日）

※「歴史」「装束」「囃子」「狂言」「能」のパートに分けて、執筆していただきました。

能の歴史

—能楽鑑賞会を通して—

一回生 中山 茜

新入生歓迎会で、能楽鑑賞会が行われた。能や狂言は、日本史の勉強のなかで少し触れたほどで詳しくは知らなかった。能や狂言について説明をしていただきながら鑑賞するという貴重な体験であった。このような経験は、機会がなければできないことであるため、とても新鮮だった。

鑑賞会の中でも私は、最初にお話いただいた歴史について強く印象に残った。能の始まりは室町時代、足利義満の北山文化からであった。平安時代『伊勢物語』や『源氏物語』、鎌倉時代『平家物語』など、室町以前の物語も能の題材になっているそう。その後、戦国時代では豊臣秀吉が能と狂言を愛好した。戦国から江戸は、能と共に歩んだ時代と言われている。イベントごとに能を鑑賞し、能を行わないと政治が出来ないと言われたほどだった。一番大事なことである政治でさえ、能と共にできないうのであったというので、私はとても驚いた。能の素晴らしさは、その時代の人々から理解され、受け継がれてきたということを知ることが出来た。歴史を踏まえて、後の番組を鑑賞することが出来たので能や狂言の面白さがより一層際立ったと思う。また、今熊野の猿楽について触れてくださったことで、能をより身近に感じる事が出来た。

私は、今回が初めての能鑑賞であった。伝統的な行事のため、緊張感があった。しかし、演者の方の「盛り上がりるところや面白いところ、声に出して笑ってほしい。」という言葉聞いて、リラックスして楽しむことが出来た。演者の方と観客が一緒になって舞台を作り上げているという一体感に包まれた。

伝統的な歴史のある能と狂言。歴史を通して演者の方の思いを

感じる事が出来た。また能や狂言の舞台を見に行きたいと思つた。

装束について

一回生 高橋 杏 奈

日常生活で能や狂言に触れる機会はなかなか無いので、新入生歓迎行事として能楽鑑賞会を開催していただけたのはとてもありがたいと思つた。私は能や狂言について難しそう・お堅そうというイメージを持っていたが、当日はそんなイメージを払拭するほど楽しむことができた。

私が特に興味をひかれた項目は、装束についてである。着付けは、二、三人がかりで一人を着付けし、着付けをする人と着付けられる人の連携が大切だと学んだ。能楽は舞台上で激しく動くため、きつめに着付けをしたり、針と糸で布を縫って固定したりするなどの工夫が施されていた。また、女の人の恰好をするためには馬の毛で作られた髪毛をつけたり、多くの衣類を何重にも身につけたりする必要があるため、とても暑くて大変だとおっしゃっていた。着付けは美しい装いを作り出すための重要な要素であるが、非常に繊細な作業で専門的な知識と技術が必要であることが分かった。

今回着付けのテーマとなった作品は、「班女」という狂女物である。狂女物は普通の女性とは違い、激しく乱れた狂女を主人公とするもので、着付けも普通の装束とは異なる。普通の装束の着付けをした後に片袖だけを脱ぐことで、狂女が普通ではないことを表現している。

「班女」の装束には美しい色使いや緻密な刺繍、金箔などの装飾が施されており、実際に見てみると華麗で優雅な印象を受けた。能楽の装束は、演目や登場人物によってデザインが異なり、「班女」のように装束だけで登場人物の情緒や役割を理解できることから、舞台芸術の一環としての役割を果たしているといえるのではないかと思つた。

能楽の装束は、日本の伝統芸能の一つとして継承されてきた。細部までこだわりと手間暇が感じられる装束は、現代においても魅力的であると思う。私は、能楽の装束を通して日本の美意識や歴史、能楽師の方の思いを感じることができた。また機会があれば日本の伝統芸能を見に行きたいと思う。

囃子について考えたこと

一回生 中牟田 琉 那

生で能と狂言を鑑賞し、これまで自分の中に何となくあったイ

メージとの違いに気づかされました。また能楽師さんのお話を聞くなかではじめて知ることがたくさんあり、同時にいくつかの疑問も出てきました。

私からは囃子についての感想を述べたいと思います。

特に印象的だったのは、各楽器の素材のお話です。能管とよばれる竹製の笛は材料が背合わせになっており、強い音を出せるようにあえてひとつ管を多くしていると教わったとき、一見シンプルなつくりの笛から様々な音色が出せる理由がわかりました。ほかにも三種類ある打楽器はそれぞれに動物の皮が使われているのですが、乾燥を好むものと湿気が必要とするものがあることを知り、同じ舞台にまったく異なる性質をもつものが置かれていることに不思議な感覚をおぼえました。

囃子の構成はステージ左側から太鼓・大鼓・小鼓・笛、それに謡を足した「五人囃子」でした。囃飾りの五人囃子は能楽からきているそうです。

囃飾りは結婚式の様子をあらわしたものであり、そこで演奏されるのは能楽ではなく雅楽であると思っていたため教わってすぐには関連が見いだせませんでした。しかし、あとから能の歴史、特に江戸時代には能が式楽にされるほどの扱いを受けていたことを考えたところ、囃飾りになっているのは人気があることの証明

なのかもしれないと思いました。

道具や動きのひとつにも意味があり、意味があるからこそ長く続いていくのだと強く感じました。充実した数時間でした。

狂言は喜劇

一回生 山下 瑞生

私は、能楽鑑賞会で狂言に触れて、狂言とは「喜劇」であると感じた。私がつけていた狂言の知識は能と能の間に見る劇であるということだけであった。能は厳かな雰囲気の中演じられるため狂言を見る前も少し固くなっていた私だが始まった瞬間に一気に空気が変わるのを感じた。語り部の声のトーンが上がり「面白いと思つたら思いっきり笑って下さい、そうすると演者も楽しく演じられるので」と言われたからだ。その時の私は自分の感情を表に出して鑑賞しても良い、むしろ出して欲しいと言われたことに衝撃を受けた。作品は寝音曲。謡が上手いことを主人に知られ、今後のことを考え言い訳をしつつも忠誠を誓う太郎冠者と何としても謡わせたい主人との滑稽なやり取りに思わず笑みが溢れた。二人の動作も面白く、太郎冠者が主人に膝枕をされながら謡うシーンは特に印象に残るものであった。狂言は貴族というより庶民によって作られた作品であり、現実世界での些細な出来事と

リンクし笑いを引き起こす、まさに「喜劇」だと思った。

今まで能も狂言も見たことが無く、実をいうと興味を抱いたことがなかった自分が実際に演じているところを見てみると気づかないうちにその世界に惹き込まれていた。今回の鑑賞で狂言に触れることができなければ私はこの「能楽」の世界を知らないまま過ごして行くことになっていただろう。日本を語る上で欠かすことのできない歴史的一幕となった能楽について、もっと深く知りたくなったのと同時に、自主的に他の作品も見に行きたいと思っただ。また、能楽以外の歌舞伎など他の演劇の世界にも触れてみたいと思った。

仕舞「橋弁慶」を鑑賞して

一回生 井上 みさき

今回披露していただいたのは仕舞「橋弁慶」、京都は五条にある橋の上で、武蔵坊弁慶と源義経の幼少期・牛若丸とが出会い頭に戦う場面であった。

まずは牛若丸登場シーン。袖から幼いながらも存分に伸びやかな声がして、実際に登壇したのは自身の想定よりも幼い演者で、拍子抜けする。最初はその見た目に可愛らしいと感じたが、演技が進むにつれ、それだけでは表しきれないような美しさや力強さ

が垣間見えてくる。仕舞謡の盛り上げで舞台も温まっている。役者の足踏みに、道具なしでも息のあった御三方の地謡が相俟って、舞台にリズム感と躍動感を与えている。そして、弁慶の登場で空気は一変。シテを演じるのはそれまでの装飾着付等の演目で見えてきた味方團氏に違いないのだが、私たちの眼前には完全に弁慶という人間が降り立っていた。さらにその後の、弁慶と牛若丸の斬り合いのシーン。やはりここが佳境であった。華麗な装束に身を包んで大雑刀を振り回す弁慶と、それを蝶が舞うかの如く軽やかに跳んで受け流す少年・牛若丸。その無邪気さもあり爽やかさもある不思議な舞が目を惹きつけて離さなかった。

演目としては十数分ほどというごくごく短い仕舞であるのに、一気に世界観に引きずり込まれるような感覚でもってして、舞台から目が離せなくなっていた。

全演目を観終わった余韻の中で、能の演目解説の際にお聞きした「能とはライブです」という言葉を思い浮かべた。私たちも舞台に参加するような気持ちで鑑賞すれば、そこに一体感が生まれるのだと。実際に鑑賞して、言葉の意味を文字通り理解することができた。日本エンタメの根幹を垣間見る素晴らしい機会だった。

二〇二二年度（令和四年度）論文題目

修士論文

歌語「いとゆふ」の変遷

小林 真歩

——漢語「遊糸」から『六百番歌合』までを中心に——

樋口一葉「うつせみ」草稿研究

宇野 美亜

——草稿から発表草稿へ至る過程に着目して——

卒業論文

上 代

『万葉集』巻四・六〇三番歌研究

青木 涼羽

——「死変」と「死反」は異なるのか——

石見相聞歌の異伝——新しい推敲説と伝承説の比較——

池田 杏

古代文学にみる鳥の表現

岡本 光希

安騎野遊獵歌群研究

岡本 有希

——四八番歌の「月」と「イニシへ」を中心に——

『万葉集』における「妹」について

加藤 美紀

大伴旅人の歌人評価の変遷——讃酒歌を中心に——

小松 桜香

鶺鴒の渡せる橋に置く霜の

瀬川 桃花

——情景歌として見るかささぎの橋——

『万葉集』の桜と梅

中谷有佳里

——『万葉集』の春を代表する花は桜か梅か——

『万葉集』巻十七「追和太宰之時梅花新歌」の解釈

野添梨衣奈

——追和「の在り方と三九〇四番歌の解釈を中心に——

『萬葉集』一九二五番歌の解釈について

濱口 桃花

——作者と「春の宴席歌」の理解を中心に——

萬葉集九八四番歌研究——月の譬喩性を中心に——

三浦 鈴佳

上代文学の蛭の研究

水野 綾乃

——『万葉集』三三四四番歌「蛭なす」の解釈を中心に——

『萬葉集』の「人目」研究

宮本 理紗

——「八目難為名「人目乎為乍」の訓と解釈を中心に——

『万葉集』の「神」

森江菜々子

——人物を修飾する「神さぶ」を中心に——

『万葉集僻案抄』にみる荷田春満の注釈態度について

安田なつみ

——『万葉代匠記』との比較を通じて——

和歌における犬の詠まれ方の広がり

藪内 花乃

——時代ごとに見られる表現方法の変化の研究——

中古

哀傷歌とほととぎす

垣内 桃花

——二条は女源氏を目指したか——
現代の道満像の位置づけ——従来の道満像をふまえて——

入江弥加子
大林久玲葉

『宇治拾遺物語』「雀報恩の事」と

「紅葉伝説」の一考察

小川 祐奈

昔話『舌切り雀』の関係性

太田菜津子

「八尾」攷

小川 祐奈

——赤本『したきれ雀』との比較を中心に——

——閻魔王と八尾の地蔵の男色要素をめぐって——

金尾 涼乃

『狭衣物語』源氏の宮の経歴の整合性

片木明日香

『古本説話集』上巻第三十八話「樵夫詠隠題事」成立考

金尾 涼乃

「虫めづる姫君」の滑稽性

清水 千寛

——木こる童と散る桜——

木村理紗子

——『源氏物語』のパロディとして——

瀬戸 茉絢

御上神社の信仰系統

小坂 理子

「書く」という義の「認む」

瀬戸 茉絢

狂言に見える地名——特定の場所が示すもの——

小坂 理子

——中古・中世期を中心に——

狂言における宗教者の力関係について

近藤 渚早

『狭古今和歌集』羈旅歌における月の役割

寺田 百花

——他の文学作品と比較して——

近藤 渚早

藤原頼長の男色関係

梅森嵯耶香

『正徹物語』における「祈恋」をめぐって

齊藤 茜

——藤原隆季と秦公春の二人に焦点を当てて——

梅森嵯耶香

源頼光にみる中世英雄像

齊藤 茜

『今とりかへばや』の女君——乳母・乳母子の不在——

山原 華

平中説話における平貞文の人物像

鈴木 千遥

中世

中世

狂言の夫婦をめぐって——問題の所在と夫の気の強さ——

木戸 真紀

玉匣からみる浦島——箱と「結び」の繋がり——

妹尾 早彩

現代まで受け継がれる天狗像

原田奈々花

狂言「首引」の変遷——中世から近世へ——

田嶋 紗也

『とはずがたり』のなかで二条が目指したもの

吉川 凜

中原中也に見られる仏教性について

谷口 由夏

『宇治拾遺物語』「僧伽多、羅刹国に行く事」の独自性

福森 梨花

『夜の寝覚』における音楽と天人の予言の効果

古橋ひな子

『平家物語』における白拍子―祇王と仏御前の比較―

松田紗弥香

狂言における狐

山本 菜未

―「狐塚」「釣狐」の変化する狐を中心に―

寝太郎説話の枠組み

脇 菜奈子

―「鳩提灯型」と「博徒髻入型」を中心に―

狂言「蟹山伏」における蟹の精の性格の独自性

渡邊 菜月

近 世

『心中天の網島』における太兵衛の役割

赤松 優奈

―治兵衛との「家」の対比から―

藤原有家の詠作手法―『六百番歌合』を中心に―

渥美 莉彩

『心中宵庚申』における心中死について

伊藤 晴菜

―元武士の「義理」と「恩愛」の葛藤―

誓紙に与えられた行為は『心中天の網島』にどう作用したか

大澤 陽香

お初と小春ふたりの遊女の性格と取り巻く環境

大隅 菜央

西鶴が描く男色―『男色大鑑』前半四巻から読む―

大西 彩香

『菊花の約』における一考察

大野 汐音

―赤穴宗右衛門と丈部左門の関係性―

『心中重井筒』における心中について

川西扶祐佳

―『心中天の網島』との比較を中心に―

『曾根崎心中』における九平次の造形

北川 啓

『曾根崎心中』における「観音めぐり」と「道行」考

久禮 圭世

―『卯月紅葉』と比較して―

『女殺油地獄』論―お吉の死に着目して―

桑島架理奈

『女大学』と近松世話物から見る近世期の女性

齊藤 希咲

―『夕霧阿波鳴渡』雪と『心中天の網島』おさんを中心に―

『冥途の飛脚』八右衛門の人物像とその役割

原田 若奈

『時雨の炬燵』における脚色の考察

福岡奈朱香

―『心中天の網島』との比較を中心に―

『義経千本桜』における鮎屋親子の人物像

藤田 真歩

―『天鼓』狐親子との比較―

『今宮の心中』貞法の説得について

堀川紗也華

―心中への影響を中心に―

『女殺油地獄』の継父・徳兵衛の考察

松井 文音

―『心中二枚絵草紙』の介右衛門との比較を通して―

『夕霧阿波鳴渡』―雪の役割―

吉田 ひな

近代

三浦哲郎「メリー・ゴー・ラウンド」考

大東 由依

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」における陰翳

西牧 和泉

泉鏡花『春宵読本』刊行とその背景

浅野 純花

「櫛櫛」の語り手と梶井基次郎

綾木 夕璃

『Litchi』における〈少女〉と幻想の役割

今井柊菜乃

『お伽草紙』『前書き』、「舌切雀」の登場人物と太宰治

大内 和花

田沢稲舟「しろばら」論——表題が意味するもの——

大嶺 桜子

太宰治「メリイクリスマス」論

副島向日葵

——クリスマスプレゼン特としての小説——

泉鏡花「外科室」論——「青山」と「谷中」の意味——

竹林 万葉

石川淳「山桜」論

辻 若菜

——「首のない女の像」の生成と消滅——

谷崎潤一郎「途上」における探偵の推理と橋との関連性

戸田 菜穂

草花の表現から見る太宰治「めくら草紙」

中川 うの

「屋根裏の散歩者」郷田三郎の人物像

中村美咲希

——遠藤殺害前後の心境の変化について——

太宰治「猿面冠者」考——〈女〉に託された光とその墓碑

長岡 綾子

泉鏡花「琵琶伝」の鸚鵡

濱谷 美里

——鸚鵡琵琶の役割とその典拠——

国木田独歩「恋を恋する人」の表題について

藤野 七緒

——「恋を恋する」という表現に着目して——

太宰治「虚構の春」

松川あゆみ

——引用文の切り貼りの表現について——

泉鏡花「海城発電」論

松野下七海

——海野と神崎の人物造形を中心に——

太宰治「ロマネスク」太宰治作品内の「芸術家」観

村上 凜香

から見る〈嘘の三郎〉における嘘の役割

森 思寧

坂口安吾「ジロリの女」ジロリ型の女性像について

横内 優菜

『闇に蠢く』の表現考察

吉川 紗矢

——「エロティックなオドロドロしきもの」とは——

谷崎潤一郎「母を恋ふる記」論

吉川 紗矢

——谷崎の母・関と母恋い性を中心に——

太宰治「創生記」石坂洋次郎批判から見る太宰治の

吉田 遥香

破滅型作家としての意識

漢文

古典文学における『梨花』について

白川 胡桃

『地獄草紙』鶏地獄の刑罰―鶏の主体性と闘鶏―

唐詩における装身具の「蟬」について

詩人柏木如亭の鯉の表現について

藤原公任の無常観について

中川 碧

野澤春夏香

小林葉瑠香

西坂 蒼羽

―一九七五年から二〇二二年の恋愛歌について―

カタカナ語の動詞化・形容詞化

―アピール・エモイを中心に―

新しい用法を獲得した言葉の変遷

―「やばい」「大丈夫」から―

実社会と流行歌詞における男性・女性の比較

―一九五〇年代から二〇一〇年代まで―

当て字表現の効果と影響 ― 歌詞を対象として ―

船場言葉の特色 ― 『細雪』をはじめとする文学作品より ―

歌詞の表現特性 ― 魔法少女アニメソングにおける ―

現代日本語におけるカタカナ語

― アンケート調査をもとに ―

岡山県の方言の現状 ― 高校生へのアンケートをもとに ―

調理説明におけるオノマトペ

― 「クックパッド」のレシピ表現から ―

女子大学生の一人称使用 ― アンケート調査をもとに ―

京丹後市方言の残存状況

― 語句、連母音の融合現象を中心に ―

富山県奥東の方言について

― 高校生へのアンケートをもとに ―

津田みなみ

土岩 和紗

都築 佳依

中川 実来

中山 智鈴

西村 美柚

西村 莉子

延原 唯

濱元 汐音

宮竹 美月

村岡さくら

村上 琴音

国 語 学

漫画と小説のオノマトペ

― 『図書館戦争』と『君の膵臓をたべたい』より ―

四国八十八か所の御詠歌における語句の異同

挨拶言葉について

― ツイッターを利用したグッズ取引の場を中心に ―

ドナルド・キーン英訳『斜陽』における誤訳

― 主語省略復元に着目して ―

現代における女性言葉の在り方

― アンケートと漫画作品の調査を踏まえて ―

日本語ラップの韻について

― 英詩「Mother Goose」、漢詩との比較 ―

オリンピックのテーマソングにみえる表現法

― 一九九八年から二〇二二年の楽曲をもとに ―

恋愛歌における男女の表現差

玉置 理乃

谷澤 里穂

高本 希望

井浦 星香

庄田 悠真

野田二千桂

足立 悠衣

西澤 朱音

京田辺市の方言の現状

森岡 日菜

—中学生へのアンケート調査を中心に—

映画ポスターのキャッチコピー

森本 雛子

—興行収入上位作品を対象として—

SNSにおける接尾辞「み」について

山内 あみ

—接尾辞「さ」との併用から見る性質—

漫画におけるシズルワード—『食戟のソーマ』より—

山名 優花

若者と敬語—アンケート調査を中心に—

山中あずみ

筑前地域における若年層の方言使用

山本 春佳

—アンケート調査をもとに—

京都府旧愛宕郡方言の現状

山本 莉帆

—高校生へのアンケートから—

米津玄師の歌詞の特性について

渡邊 美樹

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたものでも可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。
- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。
- ③ 原稿については、引用の正確さと厳密さ、出典の明示、先行研究との重なりなどに留意すること。また二重投稿にならないように気を付けること。

六、(投稿先)

〒六〇〇五八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信

権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ、或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

- 本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。
- 本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。
- 本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。
- 本投稿規定は令和三年四月一日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

大谷俊太・川島朋子・坂本信道・峯村至津子・宮崎三世

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読結果を報告、審議の結果五点が掲載となりました。

優秀論文発表会で発表し、卒業論文の要旨および卒業論文執筆体験記を寄せて下さった卒業生の方々、就職後のお忙しい時期にもかかわらず、ありがとうございます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(野澤・宮崎)